

子どもを理解できない

「子どもが理解できない」
中学校教員の年代別割合



教員が高齢になるほど、「多忙感」が子どもの理解の妨げになる。愛知教育大(刈谷市)の片山悠樹准教授(教育社会学)がこんな分析結果をまとめた。第二次ベビーブーム世代対策で教員を増員し、その後採用を控えた影響で教員は高齢化しており、片山准教授は「多忙の影響が子どもたちへの対応に出やすくなっている」と指摘する。(佐橋大)

高齢教員ほど「多忙感」影響

愛教大准教授が分析

愛教大など国内の教育大四大学が二〇一五年に小中学校、高校の教員に行った全国調査のデータをあらためて分析した。回答者は五千三百七十三人。「部活動」、生徒指導や進路指導などの「校務分掌」、「保護者、地域住民への対応」の三項目について、負担感の有無と、子どもを理解していると感じるかどうかの関係を調べた。分析によると、いずれの項目でも負担感があると、子どもの理解ができてい

ないと答えた割合が多かった。年代別に比べると、二十代では、どの項目でも負担感の有無で子どもの理解に差はなかったが、多くの項目で、年代が上がるほど、負担感がある教員では、子どもを理解できないと感じる回答が増える傾向があった。例えば、五十代以上の中学校教員で「保護者、地域住民への対応」に負担感がある人は「子どもを理解できない」を選ぶ割合が56・8%なのに対し、負担感のない人は25・7%だった。

片山准教授は「教員は経験を基に子どもの気持ちや状態を類推できるが、多忙だと、子どもと接するなどして得られる情報が限られ、経験も生かせない」と指摘。二十代では体力でカバーできて、年齢を重ねると、対応できなくなるのでは」とみる。文部科学省の学校教員統計調査によると、一三年度の公立中学校教員の平均年齢は、四四・一歳。三十年前より四・六歳高い。片山准教授は、部活動を含め、さまざまな面で教員の負担を減らす取り組みが必要だと主張する。